

看護実践研究センター報告書

令和3年度

目 次

I	はじめに	1
II	令和3年度事業報告	2
1.	なごや看護生涯学習セミナー	2
	【看護研究セミナー】	
	(1) 看護研究いろはの「い」	
	(2) 看護研究いろはの「ろ」	
	(3) 看護研究いろはの「は」	
	【看護実践セミナー】	
	(1) セクシュアルマイノリティと医療、看護 ～現状と当事者が利用しやすい医療・ケア環境のためにできること～	
	(2) 体験型オープンダイアログ ～「聴く」と「話す」が織りなすケアの可能性～	
	(3) 呼吸管理 基礎と臨床 復習と+α	
	(4) 急変させないためのアセスメント能力を高めよう（アドバンス）	
2.	なごや看護生涯学習公開講演会	11
3.	地域連携セミナー	14
4.	看護研究サポート	17
5.	昭和生涯学習センター共催講座	19
6.	看護実践研究センター共催事業	21
III	今後の課題	22

名古屋市立大学大学院看護学研究科
名古屋市立大学病院看護部

I はじめに

令和3年度は新型コロナウイルス感染症の影響が続き、引き続き社会全体、とりわけ医療現場には多大な影響がおよぶ年となりました。看護実践研究センター（以下、本センター）の企画立案や活動も状況に応じたものになっています。延期していた地域連携セミナーは無事に開催することができ、感染予防に配慮しながら実施することができました。他のセミナーは対面と遠隔を臨機応変に組み合わせ、新型コロナウイルスの感染状況が悪化したとしても多くの方が参加できるような工夫をしてきました。しかし、医療職の方々は長引く新型コロナウイルス感染症で疲弊し余裕がないような状況で、なごや看護生涯学習セミナーの参加者は大変落ち込みましたが、この機会にプログラム内容を全体的に見直す良い機会となりました。以下に、今年度の活動を総括し、課題を述べていきたいと思いません。

II 令和3年度事業報告

1. なごや看護生涯学習セミナー

担当：渡邊実香、明石恵子

「なごや看護生涯学習セミナー」は、愛知県内の保健医療職者を対象に、より専門性を高め地域住民へのサービス寄与につなげることを目的とした地域貢献事業である。今年度は看護研究セミナー3件、看護実践セミナー4件を企画したが、看護実践セミナーのうち3件には参加申込がなく、最終的に看護研究セミナー3件、看護実践セミナー1件の開催となった。また、看護研究セミナーのうち1件はオンラインによる遠隔開催とし、大きな問題もなく円滑にセミナーを実施することができた。対面によるセミナーは、十分な感染対策のもとで開催した。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
4月	セミナー実施の承認・検討 テーマおよびセミナー担当者募集開始
5月	テーマ申込み状況の把握
6月	全テーマの開催日程、場所決定、教室予約
7月	セミナー当日の役割分担、アンケートの検討 チラシ配布先、配布枚数、印刷枚数の決定 参加申込方法（メール申込、FAX申込）の検討 チラシ、受講カード、アンケートの決定 参加受付対応およびセミナー当日の役割分担表の検討 チラシ印刷発注
8月	チラシ発送（病院、名古屋市保健センター、老人保健施設及び精神保健福祉センター、愛知県看護協会など合計155箇所） 参加者募集開始
9月 ～12月	看護実践研究センターホームページで告知開始 受講生に受講カードの送付 セミナー申込み締切（各セミナーの日程により申込み締切を延長） 事務に領収書の依頼 各セミナー実施 実施前：受講者の決定、受講者リスト作成、参加申込状況の報告、講師へ連絡、セミナー当日の委員の業務内容概要説明、配布資料印刷 実施後：アンケート集計、看護実践研究センターホームページへ開催報告掲載、全学ホームページへ開催報告掲載

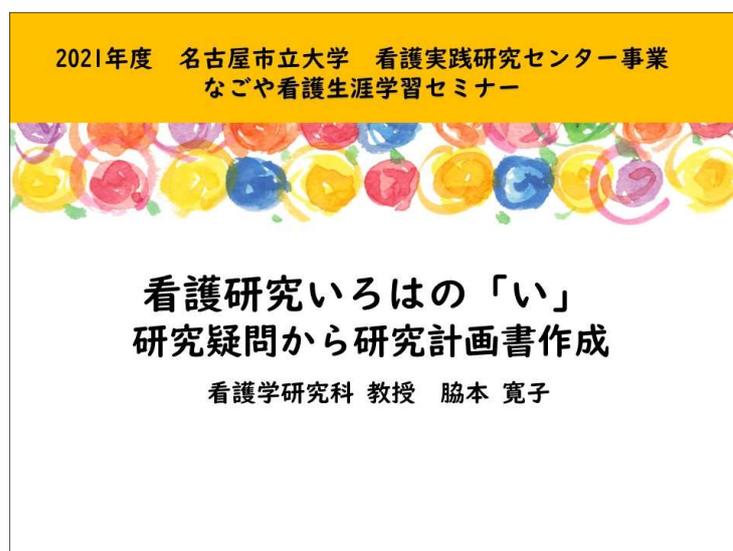
	<p>【看護研究セミナー】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・看護研究いろはの「い」 (10/6) ・看護研究いろはの「ろ」 (11/5) ・看護研究いろはの「は」 (11/12) <p>【看護実践セミナー】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・セクシュアルマイノリティと医療、看護 ～現状と当事者が利用しやすい医療・ケア環境のためにできること～ (10/13) ・体験型オープンダイアローグ ～「聴く」と「話す」が織りなすケアの可能性～ (10/23) ・呼吸管理 基礎と臨床 復習と+α 第1回 (11/4) 第2回 (11/11) 第3回 (11/18) ・急変させないためのアセスメント能力を高めよう (アドバンス) (11/28)
--	--

2) 事業の実施状況

【看護研究セミナー】

(1) 看護研究いろはの「い」

講師：脇本寛子 (名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授)
 日時：令和3年10月6日(水)9時～16時
 場所：Zoomによる遠隔ライブセミナー形式
 募集人数：10名
 参加者：4名
 参加費：6,000円



〈内 容〉

講義は、10項目（①はじめに、②看護研究とは、③看護研究のプロセス、④研究テーマ・研究課題の設定、⑤研究疑問、⑥研究論文の構成要素、⑦文献検索と文献検討、⑧研究デザイン、⑨倫理的配慮、⑩研究計画書の構成要素）の構成とした。午前（9時～12時）は①～⑥、午後（13時～16時）は⑦～⑩の内容とした。

受講生のニーズを把握するため、冒頭で、受講生に受講動機と特に学びたい内容について一人ずつ発言する機会を設けた。研究計画書について詳しく知りたいとの要望があり、受講生のニーズに合うように内容を調整した。⑤研究疑問の項目において、受講生が日常の実践における疑問を文章化し、研究疑問として表現することができるよう、個人ワークの時間を設けた。受講生に守秘義務の遵守を確認した上で、一人ひとりの疑問を全体で共有し、日常の実践から生じた研究疑問を研究目的に発展できるよう助言を行った。さらに、⑦文献検索においては、受講生が関心のあるキーワードを用いて文献検索を実際に医学中央雑誌（Web版）で実施した。どのように文献検索を行うのか、文献検索の結果からキーワードをどのように設定するのかなど、受講生のニーズに合わせて説明した。

〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

1日6時間の集中講義であったが、受講生は終始集中して受講されていた。受講生のニーズに合うように内容を調整したこと、受講生一人ひとりの研究疑問に関してフィードバックを行ったことから、セミナーの理解度や満足度は良かった。

〈アンケート結果〉

参加者4名の全員からアンケートの回答があった（回収率100%）。セミナー参加動機で多かったものは、「新しい知識を得る」3名（75.0%）、「興味・関心があった」3名（75.0%）であった。セミナーの内容は4名全員が「わかりやすかった」と回答した。また、感想欄にも「実際に論文を使いながらでわかりやすかった」と記載されていた。

(2) 看護研究いろはの「ろ」

講 師：宮内義明（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）

日 時：令和3年11月5日（金）9時00分～16時00分

場 所：名古屋市立大学看護学部棟 401 情報処理教室

募集人数：9名

参加者：4名

参加費：6,000円

〈内 容〉

11月5日（金）午前、午後で合計6時間の「看護研究いろはの『ろ』」を開講した。テーマは「量的研究の基礎」であった。量的研究とはどのようなものであるかを知り、量的研究を行うために必要な基礎知識を学習し、量的研究でのデータ分析に必要な統計学の基礎と統計解析を理解し、活用するための方法を学ぶことを目的に講習を行った。基礎とは言え、一般には馴染みにくい数学的な内容であるため、グループワークや

パソコンを用いた統計解析の演習を取り入れ、学びやすいように工夫した。
講習の概要は以下の通りである。

1) 研究デザインの分類と量的研究 9:00～12:00

まず、研究デザインにおける量的研究について概説し、次に、研究に当たって重要な論理的推論について概説した。さらに、量的研究の両翼となる観察研究と実験研究について詳説し、実験研究で問題となるバイアスについてはグループワークを通して理解を深めた。

2) 統計学の基礎と基本的な分析方法 13:00～14:30

データの代表値、基本的な統計量の説明から始め、正規分布、母集団と標本、信頼区間、仮説検定、帰無仮説、p 値、有意水準、検出力、第一種と第二種の過誤、自由度、二項分布について詳説した。次に、t 検定、符号検定、U 検定、 χ^2 検定といった検定方法について考え方から計算方法まで詳細に説明した。

3) ソフトウェアを用いた統計解析の演習 14:30～16:00

統計解析に使えるソフトウェア並びに Web サイトを紹介した。次に、 χ^2 検定を用いる例題について、Excel、SPSS、EZR、Web サイト (js-STAR) を用いて解析の演習を行った。特に、Excel については χ^2 検定を順次行うシートを作成し、理論通りに計算を行うことで χ^2 検定が行えること、統計解析専用ソフトウェアと差異の無い結果が得られることの確認をした。

<今回のセミナーにおける受講者の反応・考察>

一昨年同様、受講にあたり Excel 使用経験を条件としたため、Excel の操作でつまづく受講生は少なく、後半の演習をスムーズに進めることができた。一方で、数学的な内容の説明では、一つ一つ理解の程度を確認しながら進め、理解が進まない部分は説明を繰り返したり、説明の表現を変えたりするなどが必要であった。アンケート結果から参加者 4 名全員が「わかりやすかった」と回答しているのでその効果はあったと思われる。一方、今後にかすことができるかを問う設問では「どちらかといえばそう思う」と回答している参加者もいたことから、現在の基礎的な内容に加え、具体的な研究での活用へとつなげて行く内容を含めた講習にしていくことが次年度の課題と考える。

<アンケート結果>

参加者 4 名の全員からアンケートの回答があった (回収率 100%)。セミナー参加動機で多かったものは、「新しい知識を得る」4 名 (100%) であった。また、セミナーの内容は 4 名全員が「わかりやすかった」と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・わかりやすいが難しい内容であった。ていねいに教えていただけたので理解できた。
- ・いままで多くの時間と手間をかけて勉強したものが集約された印象であった。
- ・もっと早く学んでおけばよかったと思った。
- ・検定方法に関してまだまだ理解できてはいる部分があるが、少しはイメージがついた



(3) 看護研究いろはの「は」

講師：小田嶋裕輝（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）

日時：令和3年11月12日（金）9時00分～13時00分

場所：名古屋市立大学看護学部棟 410 演習室

募集人数：10名

参加者：3名

参加費：4,000円

〈内 容〉

本セミナーは、令和3年11月12日（金）9時～13時に開催した。講義は、大きく4項目（①質的研究とは何か、②質的研究のプロセスをイメージする、③クリティークの視点で論文を分析してみる、④質的研究の具体を知って“感覚”をつかむ）により構成された。

具体的には、①では、質的研究とは何か、質的研究の特徴、質的研究の手続き、質的

研究と量的研究の相違点について講義した。②では、質的研究を用いた論文を例に取り上げ、研究動機を研究序論としてどう発展させるかを、先行研究分析の方法と合わせて説明した。③では、クリティークの概念の説明を行い、実際にクリティークチェックリストを用いて②で取り上げた論文について詳細な批判的検討を行った。その上で、適切なクリティークを行えることは洗練された研究計画書の作成にもつながることを説明した。④では、質的研究を実践するために必要なデータ収集方法の種類やデータ分析の方法について説明した。また、自身の先行研究を取り上げながら、カテゴリー化の実際を体験してもらい、コード化する際のコツを説明した。

<今回のセミナーにおける受講者の反応・考察>

3名の受講者であり、看護職以外の方も参加されていたため、適宜質問を受けつつすすめた。質問内容は、倫理審査を受けることを視野に入れた研究計画書の立案方法に関する質問や、分析方法の具体に関する質問であった。受講生はとても話に集中している様子が見られた。よって、受講者の理解度に応じた内容となったと考える。

<アンケート結果>

参加者3名のうち、3名からアンケートの回答があった。(回収率100.0%)。セミナー参加動機で多かったものは「新しい知識を得る」2名(66.7%)、「興味・関心があった」2名(66.7%)であった。また、セミナーの内容は3名全員が「わかりやすかった」と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・量的研究との違いが具体的に理解できたので良かった。
- ・今まで研究は量的研究ではなくてはいけないと思っていたので、質的研究もおもしろいと思えた。
- ・論文の書き方まで教えていただいて、しかもわかりやすかった。



【看護実践セミナー】

(1) セクシュアルマイノリティと医療、看護

～現状と当事者が利用しやすい医療・ケア環境のためにできること～

講 師：金子典代（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）

日 時：令和3年10月13日（水）9時00分～12時00分

場 所：名古屋市立大学看護学部棟 410 情報処理室

募集人数：10名

参加者：0名

参加費：3,000円

参加申込者がなく、今年度は開催できなかった。

(2) 体験型オープンダイアログ ～「聴く」と「話す」が織りなすケアの可能性～

講 師：門間晶子（名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授）

加藤まり（名古屋市立大学大学院看護学研究科・博士後期課程）

日 時：令和3年10月23日（土）13時～16時30分

場 所：名古屋市立大学看護学部棟 410 講義室

募集人数：15名

参加者：6名

参加費：4,000円

〈内 容〉

講話と演習を織り交ぜながら、以下の4つの柱で進行した。

1) オープンダイアログ（OD）とは

フィンランドから導入されたODの発祥・実際、7つの原則、12の基本要素、日本での広がりなどについて、フィンランドでの研修ツアーの様子を含めて話題提供した。

2) 「聴く」「応答する」ための工夫：演習

(1) 「聴く」と「話す」を分ける体験

(2) 対話の可能性を広げるリフレクティング

ODの基本である「聴く」「応答する」を同時に一人の人が行うことは難しい。人や時間を分けて「聴く」と「応答する」の体験、および対話の可能性を広げるためにODでは必須として用いられる「リフレクティング」を体験した。

3) ODの全体像イメージと参加者の事例による演習

参加者に事例を提供してもらい、ODを家族支援の場面に用いるロールプレイを行った。講師側がファシリテーターを務め、参加者は本人、家族や主治医などを演じた。30分程度実施し、ふりかえる中で、ODの進め方、参加者と共有すべき約束事、留意点、ファシリテーターの役割などについて、気づいたことを話し合った。

4) 全体振り返り・残りの講義

対話の可能性として、ODが保健活動場面だけでなく、人材育成や事例検討等にも応用可能であることを伝える予定であったが、十分時間が取れなかった。

<今回のセミナーにおける受講者の反応・考察>

一人一人の参加目的を尋ねて開始した。精神看護の実践者が多く、オープンダイアログの予備知識がすでにあり、職場で試行している人もあった。時代の流れを感じた。時間的には、演習に十分な時間をとることができたが、最後の説明は急ぎ足となった。

終了後アンケート結果によると、ある程度分かりやすいと感じていただけ、今後の役に立てていただける内容を提供できたと考える。セミナーの最後にダイアログの自主勉強会を紹介したところ、半数の参加者から後日メールで申し込みがあった。お互いが継続して学習していける仲間となれることをありがたく思う。

<アンケート結果>

参加者6名の全員からアンケートの回答があった(回収率100%)。セミナー参加動機で最も多かったのは「興味・関心があった」4名(66.7%)であった。また、セミナーの内容は6名全員が「わかりやすかった」と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・ODの良さがよくわかった。
- ・体験することができ、とても勉強になった。
- ・この考え方がもっと広がり、支援につながると良いと思った。



(3) 呼吸管理 基礎と臨床 復習と+α

講師：薊 隆文 (名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授)

日時：第1回 令和3年11月4日(木) 18時30分～20時30分

第2回 令和3年11月11日(木) 18時30分～20時30分

第3回 令和3年11月18日(木) 18時30分～20時30分

場所：Zoomによる遠隔ライブセミナー形式

募集人数：20名

参加者：0名

参加費：6,000円

参加申込者がなく、今年度は開催できなかった。

(4) 急変させないためのアセスメント能力を高めよう（アドバンス）

講師：清水真名美、加藤紀子、寺澤涼子、稲尾景子、岩田麻衣子
（名古屋市立大学病院・救急看護認定看護師、集中ケア認定看護師）

日時：令和3年11月28日（日）9時00分～16時00分

場所：名古屋市立大学病院 臨床シミュレーションセンター

募集人数：20名

参加者：0名

参加費：6,000円

参加申込者がなく、今年度は開催できなかった。

3) 課題

今年度は、看護研究セミナー3件、看護実践セミナー4件を企画した。今年度より、オンラインによる遠隔開催を2件取り入れ、開催方法の検討を含め準備を進めた。

申し込み者がなかったセミナーもあり、最終的に、看護研究セミナー3件、看護実践セミナー1件の開催にとどまった。しかし、初めての試みである遠隔開催によるセミナーは円滑に進めることが出来、また、対面開催されたセミナーも感染対策をとりながら安全に開催することが出来た。全般的に参加者が少なかったことは、昨年同様、新型コロナウイルス感染症の影響が関与しているものと考えられた。開催されたセミナー内容に関する評価では、少人数でのセミナー運営のため、丁寧な講習、反復演習を可能とするなど、高い評価を得た側面もあり、少人数であったことが、参加者のニーズを満たすことにつながったと思われる。

今年度は、2007年より開催されてきたセミナー事業を総括し、事業開催方法を見直す検討を行った。経年的に参加者数の減少は否めず、企画運営に対する改善の必要性が確認された。そこで、次年度は、西部医療センターおよび東部医療センターの市大病院統合を踏まえた看護部との連携強化を図ること、さらに、本事業の対象となる医療従事者のおかれている現状を鑑み、オンラインによる開催に加え、出張講座等の開催方法の検討を行うこととする。

2. なごや看護生涯学習公開講演会

担当：宮内義明、小田嶋裕輝、松本千佳子、山吹美貴

「なごや看護生涯学習公開講演会」は、地域の保健医療職者が求めている知識、情報、話題などを提供し、結果として市民の皆様に対する医療の質向上に貢献することを目的としている。その時々々の医療情勢をふまえてテーマを選定し、その分野で活躍中の講師を招聘し、毎年1回開催している。また、本年度はなごや看護学会との共催として、下記の通り準備を進めた。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
5月	テーマ・講師について検討
6月	講師について検討
7月	講師・テーマ・参加費の検討
9月	チラシ（案）の作成 講師決定、開催日時決定、会場予約 テーマと講師の決定 チラシ送付先の検討 印刷枚数の検討 アンケート内容、チラシ原稿の確認
11月	印刷発注（1,350部） 事務へプレスリリース依頼 プレスリリース（名古屋教育医療記者会、名古屋市政記者クラブ）
12月	看護実践研究センターホームページ告知開始 講師への最終確認書類の発送 チラシ納品、チラシ発送
1月	参加申し込み状況、準備状況の確認
2月	配布資料到着
3月	看護実践研究センターホームページへ開催報告掲載 全学ホームページへ開催報告掲載

2) 事業の実施内容

テーマ：“ともに歩む”ということ ―意思決定を支えるナースのやくわり―

講師：石垣靖子氏（北海道医療大学名誉教授）

日時：令和4年2月15日（火）18:00～19:30

場所：Zoomによる遠隔ライブセミナー形式

参加費：なごや看護学会会員 500円 非会員 1,000円

参加者：100名（講演会関係者含む）

〈内 容〉

看護師の役割としてますます重要となる意思決定支援と、そこで直面する臨床倫理に関わる問題は、看護実践における重要かつ難しい課題である。本講演会では臨床倫理の第一人者である石垣靖子先生に、“ともに在り” 続けながら、“共に歩み” 続けていく意思決定支援についてご講演いただいた。当初は3年ぶりに対面での講演会（Zoomを用いたハイブリッド開催）を行うべく準備を進めてきたが、年明けからの新型コロナウイルス感染第6波の蔓延を受けて、開催日の1ヶ月前に対面での講演会は断念し、ZoomによるWeb開催のみで実施することになった。開催方法の変更という形になったが、講師をお願いした北海道医療大学名誉教授の石垣靖子先生がZoomでの講演に慣れておられたこともあり、極めてスムーズで大変分かりやすい講演会となり、参加者から好評をいただき講演会となった。尚、事前に参加者全員へPDF配付資料をメール添付で配信すると共に、事後に参加者が講演会を再度視聴できるようにオンデマンド配信も行った。



3) 参加者アンケート結果

参加者推定100名のうち、61名からアンケートの回答があった(回収率61.0%)。参加者のほとんどは看護師50名(82.0%)であったが、看護系大学教員、理学療法士、助産師、医師と本講演のテーマを反映した多職種が参加していた。講演内容について、「分かりやすかった」もしくは「どちらかといえば分かりやすかった」と答えた人は60名(98.4%)とわかりやすさについて高い評価が得られた。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・意思決定支援という点で難しく感じるが、会話のプロセスが大切だとわかった。
- ・患者さんではなく、疾患を抱えた1人の人として、対峙する重要性を再認識する事ができた。
- ・臨床倫理に正解はなく、思い悩むことやプロセスが大事だと思うことができた。
- ・人と向き合い看護する大切さを伝え続けることが管理者として重要な役割だと再度感じた。
- ・対話が大切、言葉が行動を支配するという点、患者が主体であるということ、教えていただいたことが日々の看護にすぐに活かされる。
- ・看護とは何かを整理して、オリエンテーションなど話す機会に伝えていきたい。また、組織で取り組んでいるACPについても参考にすることができる。

4) 課題

昨年度の報告書で次年度への課題に挙げていた参加費の値上げの影響については、3年前に参加費を500円から1,000円に値上げすることを決め、結果的にそのあと初の有料講演会が今年度のWeb開催となった。しかし、Web開催のみであったため無料とした昨年度よりも3割多い申込数となり、参加費の値上げによる影響は無かったと思われる。

次年度への課題としては、今回の講演会の実施により、参加人数に影響する要因として、有料か無料かよりもテーマの方が大きく影響することが示されたと思われるので、事後アンケートの結果を参考に、より多くの人に興味を持つテーマの選定を行うことが必要と思われる。

3. 地域連携セミナー

担当：小田嶋裕輝、宮内義明

「地域連携セミナー」は、市民の皆様と保健医療福祉関連職種の方々が連携して取り組むべき社会的な問題を取り上げている。さまざまな立場の人々が一緒に考えることで、解決の糸口や新たな方策の発見につながることを期待している事業である。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
11月	テーマと講師の選定、講師との交渉
12月	講師・テーマ等の決定、チラシ(案)の検討
2月	配布先の検討
3月	広報なごや5月号への掲載依頼 企画広報課へのプレスリリース依頼 チラシ原稿最終確認、印刷依頼(1,100部)
4月	プレスリリース 看護実践研究センターホームページで募集告知
5月	チラシ発送 参加者募集開始(FAX、インターネット) 参加申込者への参加の可否連絡 講師へ当日資料等の最終連絡
6月	準備状況、参加申し込み状況の報告 事前受付リスト作成開始、領収書発行の依頼
7月	配布資料とアンケートの印刷
8月	看護実践研究センターホームページへ開催報告掲載

2) 事業の実施予定内容

テーマ：在宅医療の賢い活用法 ―終末期を自宅で過ごすためには―

講師：森亮太氏（杉浦医院 院長）

日時：令和3年7月10日（土）13時00分～15時00分

場所：名古屋市立大学看護学部棟 308講義室

参加費：500円

参加者：62名（講演会関係者含む）

〈内容〉

地域で多職種が連携して行う在宅医療の工夫と終末期を自宅で過ごすための在宅医療の活用方法について、杉浦医院院長の森亮太先生にご講演いただいた。講演では、人生を終えるときには家に帰って最期を過ごすために必要な覚悟には、患者さんが家に帰ってほしいことを支える医療者としての覚悟、家に帰るといふ患者さんの覚悟、患者さん

を支える家族の覚悟の3つがあり、三者が覚悟して協力すれば、癌の末期であれ、老衰の終末期であれ、どんな状態であっても最期を家で過ごすことが可能なことを事例で紹介いただいた。

3) 参加者アンケート結果

参加者 55 名のうち、53 名から回答があった（回収率 96.4%）。参加者の一般の方の多くは無職 10 名（18.9%）、医療・福祉職の方の多くは看護職 29 名（54.7%）であり、他に教員、介護福祉士、ケアマネージャー、管理栄養士が参加していた。参加動機は「興味関心があった」と答えた人は 38 人（71.7%）であり、「新しい知識を得る」17 名（32.1%）であった。

以下に参加者の感想の一部を掲載する。

- ・症例を出して説明され、現場でのことがよくわかった。多職種で関わることの大切さ、口腔ケア、改めて再認識した。
- ・自分もリビングウィルを書き保存し、家族に伝えたが毎年、誕生日に書き直すことは、改めて覚悟を決める良い機会と思った。
- ・在宅で患者の希望する生活を送る姿をみて、病院から在宅へつなぐ際に自分たち看護師には何ができるのか考えることができた。
- ・現在病院の緩和病棟に勤務している。「その人らしい最期の迎え方」などとても考えさせられた。本人がどうしたいか、本人の為に家族がどうしたいか、など聞くことの大切さを学んだ。
- ・病院にいと禁止されてしまうことばかりだが、患者がすごしたい場所ですごしやすいように、したいことができるように調整することも医療者の仕事のひとつだと感じた。
- ・命のあり方・医療のあり方を改めて考えることができた。ACP を推進し、その人にとって悔いのない人生を一緒に選択し、実現させていきたい。



3) 課 題

対面会場と名市大病院看護部でのオンライン会場との両方で本セミナーを行うことができた。当日の運営において支障はなかった。次年度に向けて、東部医療センター、西部医療センターの看護部との連携により、本セミナーの充実を図っていくことが課題である。

また、新型コロナウイルス感染症予防のため、人数の上限を 50 名とした。対面会場の参加人数は 43 名、サテライト会場の参加者数は 12 名であった。そのため、密集・密接・密閉を避けた運営が行えた。換気の関係上、外気を循環させるため、窓を開けていたことから、空調が効きづらかった。本格的な暑さの到来する前の 7 月前半までに日程が組めるように調整していく。

また、今年度は、新型コロナウイルスの感染状況から、対面会場の受付人数は収容人数の半数の 50 名程度とした。今後も、コロナ禍を踏まえた人数制限を引き続き行い、オンライン開催も併用しながら参加人数の増加を図っていく。

4. 看護研究サポート

担当：脇本寛子、原沢優子、松本千佳子、山吹美貴

「看護研究サポート」は、看護職者が個人またはグループで行う看護研究に対して、看護学研究科の教員がそのプロセスや研究成果の発表を支援することを目的としている。臨床の場にフィードバックできる科学的根拠に基づいた看護研究の推進を通して、よりよい看護の提供に貢献することを目指している事業である。

なお、本年度から、「看護研究サポート」はなごや看護学会と共催で実施することとなり、募集や受付等の手続きをなごや看護学会事務局に移譲した。看護実践研究センターは、なごや看護学会非会員および昨年度からの継続希望者の研究サポートを担当することとした。

1) 事業実施の経緯

【2021年度看護研究サポート】前期 継続4件、後期 (応募なし)

時期	内容
4月	研究の募集開始（2021年3月に実績報告書を提出した5件に限り、メールで連絡）
5月	研究の募集締め切り（5/13締め切り、4件申込） サポート教員に継続の依頼。 前任者が退職している場合は、研究チームと教員のマッチング。
6月	後期募集について検討
7月	研究の募集開始（2021年度後期開始の2件に限り、メールで連絡）
8月	サポート状況の中間確認の実施
9月	中間確認の結果報告 なごや看護学会におけるサポートの状況報告（1件申込）
10月	後期研究の募集締め切り（10/7締め切り、応募なし） 2020年度後期スタート2件の実績状況報告
2月	昨年度実施のアンケート調査結果を基に、次年度の事業案について提案
3月	看護研究サポート実績報告書の回収とまとめ（3/1締め切り）

2) 事業の実施状況

今年度から、看護研究サポートの窓口は、看護実践研究センターからなごや看護学会に引き継がれた。そのため、今年度は継続案件のみ前期、後期で募集した。前期の応募は、継続4件（スタンダード2件、ショート2件）、後期は0件であった。サポート教員は、継続テーマは前任者が引き続き担当した。前任者が退職している場合はマッチングを行った。なごや看護学会には1件の応募があり、会員からの申込であったため当センターが窓口となる業務はなかった。

サポート状況は、中間報告の時点で対応を要する事案はなかった。しかし、2020年後期

開始の1件、2021年前期開始の2件、合計3件において指導時間が残っているチームがあった。期間延長の対応は、行わないことを確認した。

予算執行方法について意見交換があったが、講師の教材費および消耗品購入に充てることが確認された。サポート教員の研究にかかる経費は、すべて執行された。

一昨年度、昨年度と2年連続して、名古屋市立大学病院以外のサポート申し込みが0件であり、受講者のニーズを把握する必要が課題としてあり、看護研究サポートに関する質問紙調査を、昨年度末に実施した。愛知県内207施設を対象とし、看護研究サポートに関する質問紙調査を実施した。結果の概要は、以下の通りである。

- ・従来、看護研究サポートの案内を出していない施設にもアンケートを配布した結果、名古屋市外でもニーズが高いと思われるため、送付先を追加しても良いと思われた。
- ・なごや看護生涯学習セミナー「看護研究いろはの『い』」より前の段階の講演内容を加えても良いのではないかと意見が出た。
- ・出前授業のような出張研修もニーズが高いと思われ、今後、事業展開できるか検討することとなった。

アンケート結果を基に、次年度の看護研究サポートの事業展開について検討した。その結果、SE相談のような方法で、月1回程度定期的に看護研究サポートの個別相談を行う案で意見交換をしている段階である。

3) 課 題

(1) サポート教員の当該研究への立ち位置

サポート期間の教員の当該研究への立ち位置（サポートなのか共同研究者なのか）が議論になった。過去にサポート教員が学会報告時に共同研究者として名前入りすることはあった。サポート期間中はサポート料を支払っていただいていることを踏まえて、サポートであることを明確に示すこととなった。なごや看護学会に引き継がれるので、学会でも検討されるよう申し送りを行った。

(2) 後期スタートのニーズ

現在のなごや看護学会で実施されている看護研究サポートは、前期開始のみであり後期開始の事業展開はない。看護実践研究センターでも、今回は後期の新規募集を行わなかった。しかし、市大病院では後期サポート新規2件のニーズがあった。なごや看護学会が後期スタートの事業を展開するか検討して頂くよう要望し、2022年3月の理事会で議論予定である。理事会での結果により、看護実践研究センターにて後期の看護研究サポートを実施するか検討する。

(3) 次年度に向けた看護研究サポート

新規事業としての看護研究サポートのあり方について、今後、更なる意見交換、実現可能性、費用接待など詳細について検討していく。

(4) なごや看護学会との連携

今年度より、看護研究サポート事業は、「なごや看護学会」に引き継がれた。なごや看護学会の申し込まれた看護研究サポートのうち、申込者が非学会員の場合は、看護実践研究センター看護研究サポート担当が窓口となり、教員とのマッチング等の運営が必要となる。

5. 昭和生涯学習センター共催講座

担当：原沢優子、脇本寛子

「昭和生涯学習センター共催講座」は、昭和区との共催で行っている事業であり、本年度で7回目である。市民は大学という普段入ることの出来ない場で、専門的で先進的なことを低額で学ぶことができ、大学としては、学生以外にも学びを提供するという地域貢献ができる事業である。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
4月	昭和生涯学習センター担当者と講座開催方法の検討 (実務は名古屋市教育委員会 生涯学習課が担当) 企画テーマと講師案の検討
5月	昭和生涯学習センター担当者へテーマ・講師案について相談・意見を依頼 講師との交渉開始(メール・電話で検討) 講座のねらい、コマタイトル・コマ毎のねらいを整備
6月	テーマ、講師、開催日時の決定 知の広場掲載依頼
7月	広報、参加者募集開始(昭和生涯学習センター担当者)
9月	講師への依頼書発送(昭和生涯学習センター担当者)
12月	参加者抽選(昭和生涯学習センター担当)後の人数把握 会場の予約と会場下見・初回打ち合わせの日程調整 講座案内のチラシ(昭和生涯学習センター担当)を受け取り
1月	会場の臨場確認(昭和生涯学習センター担当と共に使用教室等) 講座の運営開始(1/21, 1/28, 2/18, 3/4) 第1回公開講座アンケート集計の確認・講師フィードバック確認
3月	第2-4回アンケート結果確認・講師フィードバック確認 次年度以降の運営方法案提示(3/17会議) 看護実践研究センターホームページへ開催報告掲載 全学ホームページへ開催報告掲載

2) 事業の実施内容

令和3年度後期昭和生涯学習センター事業として、「自身と家族の健康な暮らしを考える」をテーマとする全4回の講座を実施した。第1回は公開講座であり、参加者は31名であった。2回目以後は有料(受講料:900円)で、応募者54名から抽選で30名の受講者が選定された。本年度は、昨年度同様に新型コロナウイルス感染症予防対策として、会場の収容人数3分の1以下となる規模で開催した。

開催日時	内容	講師
1月21日(金) 14:00-16:00	在宅医療を始める前のキホンと心がまえ	姜琪鎬 (みどり訪問クリニック・理事長)
1月28日(金) 14:00-16:00	健診をもっと知り、健康増進と疾病予防に役立てよう	尾崎伊都子 (名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授)
2月18日(金) 14:00-16:00	家族のこころの健康維持のコツ～アサーティブコミュニケーションの活用～	小川雅代 (名古屋市立大学大学院看護学研究科・講師)
3月4日(金) 14:00-16:00	中高年期を健康に過ごすために自律神経のバランスを整える生活を考えよう	中垣明美 (名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授)

3) 参加者アンケート結果

主催者である昭和生涯学習センターが実施した参加者アンケートの主な結果は、以下の通りであった。

第1回公開講座については、参加者31名にアンケート用紙を配布し、29名から回答があった(回収率93.5%)。講座の内容について「たいへんよかった」もしくは「まあまあよかった」と答えた人が27名(93.1%)、講座の満足度は「大変満足」もしくは「ほぼ満足」と答えた人が26名(89.6%)と高評価であった。参加者の感想の一部を掲載する。

- ・姜先生の講義は聴きやすく(明るい語り、講義で)、現実的な内容であり、寂しくなりがちな内容を分かりやすく聴くことができた。
- ・在宅医療介護について理解できた。参考になった。
- ・自分がこうしたいという思いを最期を迎えるときまで大事にしていきたいと思う。
- ・普段、見聞できないことが多いので、たいへん参考になった。

第2～4回目までの連続講座については、最終日の参加者24名にアンケート用紙を配布し、全員から回答があった(回収率100%)。講座の内容は、「たいへんよかった」もしくは「まあまあよかった」(24名、100%)、講師の指導は、「たいへんよかった」もしくは「まあまあよかった」(22名、91.7%)であり、とても好評であった。参加者の感想の一部を掲載する。

- ・関心のあるテーマばかりで興味深く学ぶことができた。
- ・資料の文字が小さくて読めないところが数か所あり残念だった。
- ・全体的に分かりやすかった。
- ・在宅医療、健診、アサーティブコミュニケーション、自律神経のバランスと詳しく知る、考えることができ、気を付けて健康に過ごしたいと思う。

6. 看護実践研究センター共催事業

担当：香月 富士日

今年度より、申請のあった看護学研究科や看護実践研究センターの主催・共催・後援名義の審査を看護実践研究センターが担当することになった。また、今年度看護実践研究センターが共催した事業は下記の3件であった。

	事業名	申請者	実施日
1	第17回新生児感染症管理予防研究会 無料 Web セミナー	感染予防看護学・脇本寛子	7月16日
2	パーツ大学&名古屋市立大学 第2回オンライン交流講義 ～コミュニティの健康を評価する～	国際保健看護学・樋口倫代	11月11日
3	ハルリム大学看護学部との国際交流授業	国際保健看護学・金子典代 看護マネジメント学・城川絵理子	1月25日

Ⅲ 今後の課題

本年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を引き続き社会全体が受け、本センターの企画立案や活動も引き続き影響を受けました。しかし、大変な中でも少しずつ状況把握ができ、対応ツールも増えてきた年でもあり、臨機応変に状況にあった計画立案と実施ができたのではないかと思います。

今後は、新型コロナウイルス感染症が落ち着いたとしても、講演やセミナー開催時は感染予防対策や聴講の工夫などの必要なことを考えながらの開催となります。また、忙しい看護職者の方々が参加しやすい工夫も継続して必要です。忙しい中でも学びたいと考えられている方々のスキルアップに貢献できるように今後も課題を整理し新しい企画を考え提供していきたいと思っています。

本センターは、名古屋市立大学大学院看護学研究科が行う社会貢献事業の企画・運営を行ってきており、いくつかの事業は今年度で15周年を迎えています。その節目に15年間の活動を総括し、新しい企画を検討しています。また、次年度は15周年記念企画を行う予定です。

今年度は新たに看護研究サポートをなごや看護学会との共催で行うようになりました。学会には名古屋市を中心として多くの臨床関係者や大学関係者が所属しています。研究サポート事業を通して、ニーズとシーズ、大学と病院連携などが促進されることを期待しています。今後も地域の様々な資源との連携を推進し、地域と共に名市大が発展していけるように努力してまいります。

令和3年度看護実践研究センター運営委員会

センター長 香月富士日 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
運営委員 明石 恵子 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
小田嶋裕輝 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
原沢 優子 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
松本千佳子 (名古屋市立大学病院看護部)
宮内 義明 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
山吹 美貴 (名古屋市立大学病院看護部)
脇本 寛子 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
渡邊 実香 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
事務職員 小林真理子

名古屋市立大学看護実践研究センター

〒467-8601

名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地

TEL&FAX 052(853)8042

<http://www.nagoya-cu.ac.jp/nurse/center/>